一般演題　M　脳，神経

180. 脳腫瘍のシンチグラフィー

千葉大学　放射線科
能勢　忠男　内山　暁　川名　正直
館野　之男　国安　芳夫
脳外科
牧　豊　吉井与志彦
放射線医学総合研究所　国保　能彦

手術的に腫瘍の局在，拡がり，病理組織の明らかな脳腫瘍278例の術前脳シンチグラムを検討した．

全例にγ線カメラ使用例で，使用核種は ^{99m}Tc-pertechnetate 10～20mCi 静注内投与による．前処置として過塩素酸カリウム20mg/kgを検査施行30分前に経口投与している．（なお検査時間が2時間を超える場合，過塩素酸カリウム200mgを追加投与している）．

腫瘍の局在を描出の難易を主眼にⅠ群（天幕下腫瘍群），Ⅱ群（鞍内　傍鞍部腫瘍群），Ⅲ群（天幕深部腫瘍群），Ⅳ群（天幕上浅部群）の4群に分けて検討した．判定に際し，Equivocal 例は陰性に算入してある．各検出率はⅠ群（81%），Ⅱ群（89%），Ⅲ群（94%），Ⅳ群（86%）であり，腫瘍全体の検出率は86%（239/287）であった．天幕下腫瘍群がやや低質を示すが，腫瘍占居部位が検出率に与える影響は，従来，言及されていた程大きくはない．腫瘍種別の検出率は Glioma 群84%，非 Glioma 群（88%）とやや非 Glioma 群の方が検出率が良い．検出率の良好な腫瘍は Glioma 群では Glioblastoma multiforme, Ependymoma, Oligodendroglioma, Medulloblastome 等であり Astrocytoma（Grade I-II）では32%とその検出率は非常に悪い．非 Glioma 群では Meningioma, Metastatic brain Tumor, Pituifary adenoma 等検出率が良く，中でも Meningioma は頭蓋内のどこにあろうと全例検出されている．ちなみに最小例は小指頭大のものであった．検出率の悪いものは acoustic Neurinoma（60%）であるが，この腫瘍はＲＩ注入後2—3時間目の delayed scan を導入してからは85%以上の高検出率となっている．

演者らは，さらに false Negative 例（特に benign Astrocytoma）を組織像，脳血管写上から分析し，また acoustic Neurinoma, metastic brain Tumor 等 delayed Scan が有効な症例を供覧し，その有用性を強調したい．

181. 高齢者の脳スキャンの意義—脳腫瘍について

東京都養育院付属病院　核医学放射線部
川口新一郎　阿部　正秀　村田　啓
千葉　一夫　松井　謙吾　山田　英夫
飯尾　正宏
脳神経外科
布施　正明　星　豊

開院以来3年間に脳スキャンが約千回に達したので脳腫瘍を中心にまとめた所，高齢者に幾多の特異的所見もあり報告する．47年7月より本年4月までに本院の入院外来患者743名970回の脳スキャンを行った．男性401名女性342名であった．1～49歳77名，50～64歳82名，65～95歳584名平均69.1歳であった．743名中臨床上および脳スキャン上脳腫瘍と診断された患者は64名（9%）であったが，今回は剖検または手術にて確認されたか，臨床的にもほぼ確実と思われる53症例（7%）を対象とし解析して男性31名，女性22名であり，原発性30例．転移性23例であった．原発性では髄膜腫・神経膠腫・下垂体腫瘍が多く，転移性では肺癌が65%と大半を占めていた．老人に特異的な所見の1つとして脳腫瘍の臨床症状が非常に出難く，いわゆる silent tumor と考えられる例を4例に認めた脳腫瘍特有の臨床症状の出現率は加齢と相関を示した．まず脳腫瘍の存在で発見された転移性脳腫瘍は5例であったが，この中4例は肺癌からの転移であった．53例中24例に手術が施行されたが，手術結果は有効なものが多かった．脳血管障害と腫瘍の鑑別が難かしい事も老人脳疾患の特徴であり，スキャニング法は有用である．老人患者には脳血管撮影等施行できない例もあり，脳スキャンはスクリーニングならびに最終診断として重要性が大きい．無症候性脳腫瘍の検索は特に高齢者の診断に重要であろう．

Presented by Medical*Online